



県立東雲高校
文化祭へようこそ！

AMAGAWA Suzu

誰もが小説になり得る人生を送っている。小説にならない人生を生きている者などはいない。

そう言って古文の芦田は出ていった。

この物語の語り手は龍蔵寺朱夏。

語るような内容があるとは思えない平凡な一人の女子高校生だ。けれども本当にすべての人が小説になり得る人生を生きていると言うのなら、高校最後の文化祭の前後の、あのたわいのない時間をどうか聞いて欲しい。特に何も起こらないことが当たり前で幸せで、そして不思議だったあのかけがえの無い時間を。

文化祭を控えた6月23日の夕方からこの物語を語り始めたいと思う。

—◆—

「あか、帰ろ」

みどりこ
碧子が声をかけてきた。

しゅか
朱夏は書きかけの学級日誌を指さした。

「今日、遅刻っていたっけ」

「たしか前田が遅刻だったよ」

まえだ一と碧子は話しかけ、ああの返事がした。

「ってさ、あか」

朱夏は遅刻欄に前田1名と記入する。

「おわり？」

かけられた声にならずいて机の脇からリュックを取り上げた。

「あか、いつも重そうにしてるよね。置勉すればいいのに」

「毎日持って帰っていると慣れるというか、最高六科目だからそんなにはね」

「ふうん」

碧子は気のない返事をして

「職員室寄るでしょ」

まわりを見ると机が下げられてスペースを確保されだしている。掃除が始まっている。

「ホラ！」

碧子がうしろの入り口のドアで大きな声を出してうながした。

「あかは大学決めた？」

職員室まで並んで歩きながら碧子に訊かれた。

「碧子は決めたの？」

「あたしは明学。白金台ってトコで過ごしてみたいから」

「白金って、東京の真ん中かあ…。私にはムリかな」

「あかなら入れるよ」

「ムリムリ」

「そーなの？　じゃアレはなに？」

碧子は共有スペースに貼ってある紙を示した。

第〇回模擬試験結果とある。

「日本史85だよ。全国8位って」

「まあ、日本史はね」

「他は？」

「国語が53、英語は38かな」

朱夏はその紙をちらりと見てリュックを背負いなおした。

「3教科だと、いくつ？」

「58かな…」

「58！？」

「いつもは51くらいだし、たまたまだよ。今回は文化史が中心だったから他の人が出来なかったんじゃな

いかな」

朱夏と碧子は教室に近い東側階段を上がる。

県立東雲高校の校舎は三つの棟から成り立っている。北から職員室や事務室、生徒会室などが入っているA棟。普通教室があるB棟。そして特別教室があるC棟である。AからC棟をつらぬくように渡り廊下がつながっている。上から見れば漢字の五の文字のようになっている。

三年生の教室はB棟一階で職員室はA棟二階にある。

だだだだっと男子が駆け下りていく。学校内がさわがしい。

「この時期にやらなくても良いのに」

「なにを？」

「文化祭。六月ってありえないよ」

碧子が大げさに頭をふってみせた。

「そう？香風女子も同じ日だって聞いたけど」

「南高もらしいよ」

「人が来なくていい。人ごみ嫌いだから」

「模擬店禁止って時点でない」

「私はやらなくても良いと思ってる」

階段を上がりきると二年生のフロアになっている。

三年生のフロアに比べると華やかな感じだ。

A棟への渡り廊下を歩く。上に卒業生の進学先と名前が書かれた短い木の札が並んでいる。

「立命館がいたんだって思うよ」

碧子がつぶやく。国立文系コースにあって碧子はそうそうに私立に絞っている。

朱夏もつられて見上げる。けれど、見た先は山形大学人文学部の合格者だった。

職員室の前にはテーブルが置かれていて、荷物を置けるようになっている。

碧子がバッグをそこに置いたのを見て

「日誌置いたらすぐに出てくるね」

「私もちよっとだけ」

ドアをノックしてから一緒に入る。

担任の藤崎先生は席にいなかった。

「どうしたの？」

立ち尽くしていると隣の八木先生が聞いてきた。

「日誌出しに来ました」

「置いといて」

朱夏は日誌を置いた。

職員室の奥つまりは反対の方を見ると碧子が誰かに話しかけている。

朱夏もそちらに歩いていき頭を下げた。

「龍蔵寺も用？」

「いえ…。日誌出しに来ました」

「用は終わり？」

「はい」

「七組は文化祭なにをするの？」

「先生、それはないですよ」

碧子が楽しそうに言う。

「男子が何か言ってるけど、よくわからない感じです」

「碧子、ちゃんと司会でHRにいたよね。実行委がそれ？」

朱夏はあきれた。

「男子が口だしするなって言ってるんだから良いんだよ」

「碧子、長くなるなら帰っちゃうけど」

「別に特につてことはないから。先生これから補習でしょ」

そんな時間かな…と言いながら羽場先生はPCでの作業に戻った。

「帰ろっか」

碧子が歩き出す。朱夏もうしろをついてゆく。

6月23日 晴 欠席なし、遅刻前田、早退なし 特記事項文化祭四日前



がしがしとタワシでカウンターの上につり下げられていた電灯のガラス球の内側をこする。

飛び散る水しぶきに朱夏は少し後悔していた。

「龍蔵寺さん、割らないように気をつけてね」

司書の郡司先生も隣で同じようにタワシを動かしている。

「結構おちるものね」と楽しそうだった。

「龍蔵寺さんのクラスは準備進んでる？」

「なんか男子主導で動いてて、よく分からないです」

水を入れてクレンザーを洗い流す。真っ黒な水が満ちていく。

朱夏は顔をしかめた。

「二年生の和泉ちゃんのクラスはお化け屋敷だって言ってた。龍蔵寺さんは古本市で大丈夫？」

「はい。大丈夫です」

朱夏はクラスの当番から逃げたので、古本市に引きこもることにしていた。

「でもずっとじゃつまらないでしょ。見に行つて良いんだからね」

朱夏は少し淋しい目をしてから、ガラス球の中の水を捨てた。

電話の呼び出し音がして郡司先生が「あとお願い」と水を止めると司書室の方に駈けていった。

後ろのドアが開いて4人の生徒が入って来た。

中庭からは楽器の音がしている。さっきから吹奏楽部が練習を始めていた。

ガラス球をすすいで洗面所のスミに置いた雑巾の上に伏せて置いた。雫がつつ…と下に流れ落ちていく。

郡司先生がいた洗面台の洗いかけのガラス球の前に立ち、すすぎをして汚れを流す。さっきのガラス球の隣に並べて置く。

ポケットからハンカチを取り出して口にくわえてから手を洗った。ピッと水を切ってからハンカチで拭う。

カウンターに戻ると返却本が増えている。後ろの司書室とつながったガラス戸をあけて「先生終わりました」と声をかけた。

机で作業をしていた郡司先生が顔を上げてうなずいたのを確認してから戸を閉めた。

カウンター周りにはいろいろと雑多なものが散らばっている。カードの預かり箱、返却本の箱、ハンコのためぐいが2~3コ。朱夏は気がついてカチャカチャと4回入場者カウンターを押した。

数字が4回まわって32になった。下に開かれた日誌に昨日は28と書いてある。

朱夏はイスに腰掛けると床に置いたリュックから化学のクリアファイルを取り出した。

碧子から借りてきたプリントと並べて空欄を埋めていく。

molの計算があったので、再びリュックに手を突っ込んで電卓を取り出す。

碧子が暗算でしただろう数値を公式と照らし合わせながら時折電卓をたたいてなぞってゆく。

計算ミスを見つけてしまった。

朱夏は手を止めて、目の前にある付箋を一枚はがした。【○○になるはず】と書いて貼っておく。

すべての空欄に書き入れ終わるとクリアファイルに入れて机の上に置いた。

さっきから中庭では音出しが終わった吹奏楽部の演奏が響いている。しばらく聞いていると“ジョニーが凱旋するとき”に変わった。

「先輩」

顔をあげると二年生の和泉ちゃんが立っている。

「ん？ 何？」

「値札付けてどうなりましたか？」

「昨日終わったよ」

「じゃあ、今日は終わりですか？」

朱夏はうなずいた。

「私茶道部の準備があって…」

「大丈夫だから行って良いよ」

「ありがとうございます。あ、それと」

「それと？」

「これ」

渡された黄色い短冊状の紙を見ると何かの券のようだった。

「お茶立てるので来てください」

よく見ると 300 円と書いてある。

「いいの？」

「できれば」

朱夏はリュックから財布を取り出して 300 円を渡した。

「ありがとうございます。浴衣着るんで来てください」

バイバイと手を振って和泉ちゃんを送り出した。

カチッと音が響いて時計を見ると 16 時 45 分だった。

カウンターから出て、残っていた生徒に閉館を告げる。

「先生閉館準備して良いですか」

朱夏は司書室にヒョコッと顔を出した。

郡司先生は軽く手を振り返した。

カーテンを開けて窓のカギを確認すると生徒は全員いなくなっていた。

西側入り口ドアのカギを閉めて東側に歩いて行く。ついでに中庭を覗くと吹奏楽部も音楽室に戻るところだった。

6 月 23 日 晴れ 来館者数 32 人 貸出 13 冊 返却 8 冊 世はすべてこともなし

—◆—

朱夏は黒板を写している。

今は朱夏の苦手科目、英語の時間だった。

去年の修学旅行で京都に行った時、外国人に話しかけられてかろうじて time の単語で時間を尋ねているのは分かったから時計をみせてごまかした。

一応は進学希望だからとりあえず英語は必要だと認識はしている。でも認識する事と出来る事とは意味が違う。

あっと口を開いてから朱夏は消しゴムを取り上げてさっき書いた単語を消す。

ピーターラビットの執筆時のエピソードとナショナルトラストについて書かれた文章のようだけれど、正直関心が持てない。英語が出来れば分かるのかと言われてれば、それさえも覚束ない。どちらが先で、後なのか朱夏にはよく分からない。

「松下、ここ訳してみろ」

碧子がすらすらと訳すのを聞く。かっこいいなと思う。

「先生」

男子が手を上げた。

「文化祭の準備して良いですか？」

「なんだ、終わりそうにないのか」

「はい」

「まあ良いか。静かにやれよ」

「やった」

叫ぶ声がして教室中がざわつく。

朱夏は立ち上がりず頬杖をついて窓の外に視線を向けた。大きなケヤキの樹とその周りにベンチが据えつけられている。

朱夏の目が見開かれ、瞬きをしてもう一度見る。

「どうしたの」

目の前に碧子がいた。

「さっきあそこに白いセーラー服着た女の子が…」

「いないよ」

「だよねえ」

これはやっぱりあれか？ 文化祭の前に現れるとかいうやつなのか？ などとくだらない妄想に引きずられていく。

「あか」

ポコンと碧子が朱夏の頭をノートではたく。

「碧子」

顔が近い。

「少しは手伝うそぶりくらいしてよ。さすがにさ」

「と言っても何をすれば良いのか」

「これ切って」

碧子から黄色と水色の色紙を渡された。格子状の線が印刷されている。

「カッターで良い？」

「良いよ。全部だよ」

「了解」

ペンケースからカッターを取り出して短冊状に切り分けていく。

前の席に座ってハサミで同じ作業をしている碧子に尋ねる。

「これってなに？」

「入場券」

「こんなに来るの？」

「さあ男子が用意しろって言ったから用意しただけ」

つまらなそうにチョキチョキと切っている。

「結局なにをするの？」

「よく分かんない」

「碧子が分かんないんじゃ誰も分かんないんじゃない…」

「これが買い出しリスト」

朱夏がのぞき込むと

コンクリートブロックー〇個

ブルーシートー〇枚

ベニヤ板ー〇枚

あゆー〇匹

…

「あゆ…？ って魚の？ 塩焼き？」

「いや、模擬店は禁止だよ」

「よく分かんないけど、藤崎先生よく許可したね」

「あの人、当日は招待試合でいないんだよ。どうでも良いって思ったんじゃない」

「招待試合？」

「この間配られたしおりに読んでよ。実行委で作ったんだから。野球、サッカー、あとはバスケかな。

他校を呼んで試合する予定」

みどりーと遠くから呼ばれて「いまいく」と返してから、つつつと舞うように碧子は行ってしまった。

朱夏は手を休めると再び外に目を向けた。

空を見上げると少し雲がかっている。明日から雨の予報だった。

文化祭は明後日から二日間開催の予定である。

6月23日 曇 作った入場券 300枚

当日の出し物は謎。